

〔漆工芸の美展によせて〕

大明宣徳年製銘『螺鈿平脱描漆描金草花虫文食籠』 (大和文華館蔵)について — 毘陵草虫図との関係 —

昭和15年(1940)、美術研究所所長(のち大和文華館初代館長)矢代幸雄氏が中国大連市において入手した黒漆塗りの食籠(図1)は、その後、大和文華館の所蔵品になりました。かつて昭和16年、漆工史家吉野富雄氏は「大明宣徳年製倭漆食籠に就て」(『美術研究』第113号)と題してこの食籠を紹介しました。この小文では、吉野氏の論文に基づき、その後の新知見を交えて解説いたします。

本食籠の蓋の甲面上部と身の側面口縁部の二個所には、描金(蒔絵)による「大明宣徳年製」(宣徳年間1426—1435年)の銘があり(図2)、器形は明時代の典型といえるものです。高さは15.5cm、口径は33.0cmで、円形黒漆塗りの大形の食籠であります。蓋と身はほとんど同形で、上下の角には広い几帳面(角に刻み目を入半円形に削ったもの)が施され、素地は薄手の木製の曲物を心として布貼り漆塗り、器体の稜角は全て丸味をおび、柔麗な形をしています。

蓋の甲(図3)はとくに傷みがはげしく、現状ではその文様はよくわかりません。吉野氏が昭和16年にそれを描き起した「図面」(図4)を見ますと、そこには土坡に桔梗、菊、蕪子のような草花が咲き、そ

れをめぐって蝶やアブが飛ぶという自然の情景がやや俯瞰した視点から表されています。草花は正面向きで装飾性の強いものです。空の上方には柳引く雲が表されています。また蓋の面取部や身の側面部も同じデザインで、円周帯状の面(四面)には六方に土坡に草花虫の図柄が配されています。加飾法については、主に二色の描漆(明るい朱漆<洗朱>と濃い朱漆)で描き、花と葉の一部には夜光貝の螺鈿と真鍮の平脱(金貝)をもって填じ、土坡には描漆に真鍮の小さな切金(点苔を表す)を交え、また銀泥を加え、蝶の二羽は金の描金で表し、横雲には螺鈿と朱の描漆を交錯させて表しています。吉野氏は蝶と銘の描金(蒔絵)に注目して、日本中世の蒔絵技法からの影響ではないかと指摘しています。

私は15年ほど前に石川県立美術館の展示室において大和文華館の食籠と姉妹品かと思うほどの食籠(財団法人前田育徳会所蔵)を見ました。器形、文様、技法、法量はほとんど同じで、身の側面の「大明宣徳年製」の描金銘も同じ書体でありました。前田育徳会の食籠を精査する機会はまだありませんが、石川県立美術館の学芸員南俊英氏のご教示によりますと、前田

家では本品を「唐物蒔絵食籠」と呼び、箱の貼り紙には「食籠、大形花卉に羽虫貝入蒔絵」「食籠、唐蒔絵丸形色絵貝入」とあり、前の「宣徳」の描金銘(一個所)の他に、身の底の中央に金泥銘「御用監造」、蓋の内側の中央上に金泥銘「御用監造」があるそうです。「御用監」とは宮廷用に調達される器物を用意したり、保管したりする内府の部局の一つで、そうしますと、二つの食籠は宣徳内府の公用品といえることができます。

さて蓋甲の図様の特徴について、二つの点を指摘したいと思います。一つは螺鈿と描漆による「柳引く雲」の形について、これは明初の永楽期(1403—1424年)に出版された絵入り刊本『観音経普門品』(北京図書館蔵)の「柳引く雲」(図5)と共通し、明初特有の雲の形です。もう一つは土坡と草花虫の表現について、草花をめぐって蝶やアブを飛ばせる図様は、宋時代から明時代までの長い間、江蘇省の毘陵(常州)でさかんに制作された「草虫図」と共通します。毘陵の「草虫図」は我が国に早くから将来され、「紅白川」の名で親しまれてきました。その代表作である明時代の呂敬甫筆「草虫図」(図6、京都・曼殊院蔵)は白緑の点苔のある土坡に銭葵や菊や蕪子、そのまわりを蝶やアブが飛ぶ情景が写実的に描かれています。広い階層の人々に愛好された毘陵の「草虫図」が中国の漆工芸のデザインに転用されたことは十分に考えられることです。(林進)



図5 永楽刊『観音経普門品』雲図

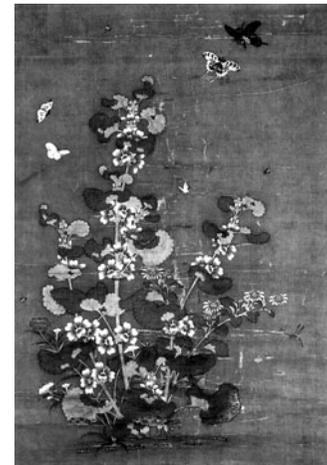


図6 毘陵の『草虫図』(部分)

図2 二つの「大明宣徳年製」銘



図3 食籠蓋の甲面



図4 (図3)の描き起し図



図1 草花虫文食籠 大和文華館蔵